

臨床活動報告 — 1 —

「女性のこころとからだの相談室」における活動報告

岡 島 文 恵

はじめに

平成15年4月に設置された「女性のこころとからだの相談室」における相談は、相談業務を開始した6月からまる2年が経過した。京大病院に通院する妊産褥婦のみを対象にする「ママ・ベビー相談」と、広く一般の女性とその家族を対象とする「女性のこころとからだの相談」の2本立ての相談体制で開始して、少しずつ相談業績を伸ばしてきた。いずれもメディカルスタッフが担当し、十分時間をかけて気軽に相談に応じられることが特徴である。医学部保健学科の教員が担当する「女性のこころとからだの相談」は、女性のライフサイクル全般にかかわる諸問題について、助産師、保健師、看護師、作業療法士、理学療法士、臨床心理士などの専門職が相談内容に応じて対応している。

今回は、この「女性のこころとからだの相談」の平成16年度以降の相談業務について実態を報告する。なお、当相談室の開設の経緯や平成15年度の相談業績については、昨年度の当学科の紀要第1巻を参照されたい。

「女性のこころとからだの相談」の概要

1. 女性のこころとからだの相談室の目的

一年前から行われていた「ママ・ベビー相談」に加えて、女性のライフサイクルに関わるこころとからだの問題をトータルシステムでケアする。

2. 女性のこころとからだの相談業務体制

完全予約制の個別相談で、相談の時間帯は月曜日から金曜日の13:00～15:00の2時間である。しかし、相談者の多い領域は15:00以降に相談を受けることがある。一人当たりの個別相談の時間は相談内容によって異なり、30分～1時間である。希望により予約制の電話相談も可能である。

予約業務は保健学科の教員が行っており、火曜日と水曜日の13:00～15:00に予約を受け付けている。

3. 保健学科の教員による相談業務の内容と担当者 (表1)

相談内容の特徴と実績

1. 各領域における相談内容

月曜日の思春期・青年期の心理的問題についての相談では、主に不登校や引きこもりの子どもを持つ母親が単独または子どもと共に来院する。相談によって問題を整理し、当面の方針を立てることで安心感が高まり、親子関係の改善がみられ、子どもの状態も少しずつ改善していくことが多い。また、自分の性格や対人関係などの悩みをもつ青年期女性の来談も多く、毎週、時間帯を延長して対応している。

来談者の年齢層は、思春期にある10歳代および思春期の子どもの親の年代である30～50歳代が多い。相談は継続して行われているケースが多い。

火曜日の思春期・成人・更年期・老年期の相談では、更年期障害、乳房に関するトラブル、生活習慣

表 1

曜 日	担当教官	担当医師	主な相談の対象者	主 な 相 談 内 容
月曜日	菅	十一	思春期、青年期にある女性と家族	思春期・青年期にある女性の心理的問題
火曜日	桂, 赤澤, 奥津, 池添, 我部山	田中, 高倉	思春期, 成人, 更年期, 老年期にある女性と家族	思春期の身体的諸問題, 生活習慣病の予防, 介護問題, 更年期問題, 中高年者の健康増進や体力づくりなど
水曜日	小西, 加藤, 大畑	加藤	児の発達に不安のある母親, 家族	児の学習障害やコミュニケーションの問題などの発達障害, 運動障害等
木曜日	日隈, 柳吉, 坪田, 宮島	高倉	妊娠～子育てにある女性と家族 睡眠や住まいに関する問題を持つ女性・家族	妊娠から子育てに至る過程において, 女性が遭遇する種々の問題 睡眠・住まいの相談
金曜日	岡島	高倉	育児中の母親, 家族	母乳育児に関する相談および育児相談

病、在宅療養・介護に関する問題、高齢者の健康・体力作りといった様々な相談内容について、利用者が不安や心配を十分表出できるよう、ゆったりとした雰囲気作りを心がけながら相談を受け、高い満足を得ている。相談内容では更年期障害に関する相談が多い。多くは1回の相談で終了することが多い。

来談者の年齢層は、30～50歳代を中心に10歳代や80歳代の高齢者まで広範囲にわたっている。

水曜日の子どもの発達に関する療育相談では、発達の遅れや偏りの見られる子どもの相談を家族から受けている。相談内容は運動、言語、知的、社会発達等多岐にわたる。特に学習障害、注意欠陥多動性障害、アスペルガー障害等の軽度発達障害児の行動理解、学校支援や自閉症児のコミュニケーション障害に関する相談件数が多いのが特徴である。また、未熟児、脳性麻痺等による運動の遅れや重症児の家庭療育に関する相談に対しても年齢、障害の程度に関係なく相談に応じている。療育相談は週1回、2名しか相談を受けられない状況であり、現在予約が半年後までいっぱいとなっている。継続相談となっているケースも多いが、新規に相談予約をする親も多く、子どもの発達に不安を持っている親が多いことが推測できる予約状況である。

木曜日の妊娠・出産に関わる妊婦・不妊・不育等の相談では、医療施設などを受診中の女性が多い。相談内容は妊娠・分娩に関する思いや生活指導、不育症、不妊症、女性の健康、性に関する相談、治療や検査について理解と納得ができる説明を受けたいというものや、医療の場面では話しにくい不安や生活に関する相談など多岐にわたっている。

来談者の年齢層は30歳代後半が最も多い。1回の相談で終了することが多いが、最近は再来で相談に来る女性が微増している。

睡眠障害・住まいの相談は、思春期以降の年齢層が

主な対象者となる。

金曜日の母乳・育児相談では、母乳育児中の母親による母乳分泌促進または乳房トラブル、断乳（卒乳）に関する相談が中心である。乳房マッサージによる分泌促進、乳房トラブルの解決を図るが、同時に育児や産褥期の褥婦の身体に関する相談も多い。継続して来室する母親が多いが、週1回の相談のため、乳腺炎など緊急の場合に備えて他施設への紹介も行っている。

2. 各領域における相談実績

平成16年4月から平成17年7月末までの相談内容と相談延べ人数は下記の図1のとおりである。相談延べ人数は平成15年度より増加してきている。

今後の課題

1. 相談内容による相談実績の偏り

思春期・青年期の心理的相談および療育相談は、すでに数ヶ月先まで予約される状況にある。しかし、その他の相談については相談時間に空きがある。広報が京大病院内に限られているため、思春期・青年期の心理的相談および療育相談のように、外部からの紹介がある相談以外は相談件数が少ないのが現状である。京大病院通院中の不妊の女性が来談に来るようになってきたので、今後増える可能性はある。また、メディアによる広報以外に口コミによる来談者も増えているので、徐々に増加する可能性はある。京大病院通院中の妊婦・褥婦を対象にしている「ママ・ベビー相談」と相談内容が重なる妊婦、母乳・育児相談や京大病院の診療科等が提供する相談と重なることがある成人・更年期・老年期の相談は、相談室の有用性を高めるため広報に関する工夫などが必要と考えられる。

2. 相談予約業務の担当者について

予約業務については、相談内容によって大勢いる担当者の中から適任者を決定する必要があるため、当相談室開設教員が担当してきた。しかし、教員の負担が

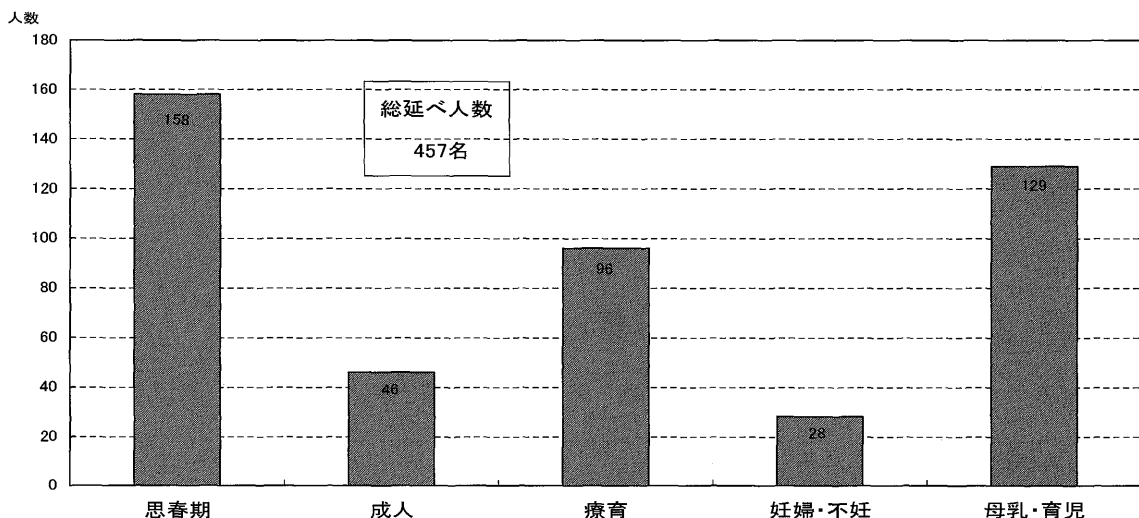


図1 相談領域別相談延べ件数

大であり、今後の予約業務のあり方について引き続き検討する必要がある。

3. 相談料金について

当相談室開設以来、無料で相談を実施しているが、私費料金の徴収を引き続き検討する必要がある。

お わ り に

当相談室は、京大病院受診者だけでなく、他の診療施設の受診の有無にかかわらず、こころとからだに対して不安や問題を持つ女性や家族の相談を受けてい

る。さらに直接相談したい方だけでなく、本院以外で相談を担当している専門家の方々の相談にも対応しており、直接的間接的に地域における女性の心身の健康増進に貢献している。

また、地域で活躍する専門家だけでなく、学生等の「教育の場」としての役割も果たしつつある。

今後とも、一層質、量ともに充実した相談を提供できるように課題について解決策を見出し、広く貢献できるようにしたいと考えている。